

入 試 制 度

共通1次学力試験成績と、各大学が独自に行う第2次試験成績とを総合して入学者を選抜するというのが、昭和54年度以来実施されてきた我が国の現行の国立大学入試制度の大枠である。各大学では、現行の入試制度に直接・間接に係わる基礎的なことがらについて、現行制度発足以来継続的に調査研究を重ね、成果を蓄積してきた。多くの大学では、これらの成果に基づいて、現行の制度の枠内で、推薦入学、特別入学（海外子女、社会人など）、学士入学、3年次編入学、2次募集などの制度を取り入れて具体的な入学者選抜を行っている。さらに、第2次試験科目の中に面接、小論文、実技などを含めたり、高校調査書を重視するなど、永年にわたって蓄積された研究成果は、入学者選抜方法の具体的改善のために活用されてきた。本年度もこの方向の地味な調査研究が続けられた。推薦入学、2次募集その他の特別な選抜方式による入学者と、一般選抜方式による入学者との、各種属性に着目した比較研究が行われた。特に、推薦入学の判定の規準となる具体的な数値を推定するための研究、面接試験の評価に関する研究、共通第1次学力試験の自己採点の精度や誤差にまつわる統計論的・確率論的研究、全国の高等学校に対するアンケート調査を通じての共通第1次学力試験の内容分析や現行制度に対する批判・意見の分析などの研究が行われた。昭和54年度以来蓄積された各種入試データを時

系列的に調査分析することによって、現行制度の見直し、あるいは問題点の整理を行った大学も多い。

また、入学者選抜のための資料として、学力以外の要因、例えば人物評価、適性評価などを積極的に活用するための調査研究が行われた。共通第1次学力試験と第2次試験の関係を、客観検査と記述試験と捉えて、両者の比較検討を行った大学もある。

入試実施組織は、教官組織と事務組織から成り立つが、より望ましい入試実施組織の在り方について検討を加えて、現状に於ける問題点と今後の課題・展望について整理を行った大学もある。

以上は現行入試制度の下での実態に即した調査研究であるが、文部省の科学研究費補助金による特定研究「日本の高校教育課程と大学入学試験の国際的比較研究」がある。これは、スイスのジュネーブに本部事務局をもつ国際バカロレア（IB）最終資格試験の試行テストを、日本の大学の新入生に対して実施し、IBの最終資格試験の水準などを調査したり、共通第1次学力試験や2次試験の成績及び入学後の成績などと比較検討することによって、IBの最終資格試験の性質や特徴を明らかにしようとするものである。このような国際的視点に立った調査研究の成果は、我が国の大学入試制度改善のための貴重な資料を提供するものと期待される。

昭和 62 年度から、いわゆる受験機会の複数化が実施され、自己採点制度の廃止、事後選択制度の採用など、昭和 54 年度以来続いてきた現行制度の枠組みは大きく様変わりしようとし

ている。各大学では、受験機会の複数化を円滑に進めるための施策を含めて、昭和 62 年度以降の入学者選抜に関する諸問題の具体的検討を行っている。